



06.05.2019

Yveline et moi

Eijiro Ito

パリで最も古く作られたロータリーは「Place Furstemberg」と言われています。その広場に佇むと、その昔枢機卿を乗せた馬車が出たり戻ったりしていた事を想像し、現在まで時や記憶もそこを通過している陰影が私の心をくすぐります。

その場所に隣接する古物商「Yveline」との出会いは唐突でした。この店の前を偶然通り過ぎた時、このギャラリーが持つ独特な雰囲気とマネキン達に心を奪われ、そして『貴方の記憶に私を刻んでください』と問いかけてきた気がしたのです。

このギャラリーに受け入れられた古物はこの場を経由し、また新たな家主の元へと取引され新たな歴史を築いてゆくのでしょうか。

初めて撮った古物商の写真をフォトポリメーラグラビユー（写真製版）にし、出来上がった作品を届けました。そしてその版画を私の作品にする許可をお願いした時、店主は快く承諾してくれました。そして何時でも好きな時に撮影してくださいと言ってくれました。

それから私はこの店の前を通り過ぎる時、偶然の旅行者のような気持ちでカメラのフレームを店のウィンドウへと構えます。

その時心のどこかで思い描くのはベンヤミンの「パッサージュ」や「フラナン（歩く人）」、200年前のパリの面影の事でした。

ある時、店主が「この場所は平和、そしてハーモニーである事が大切なのです。」と語ってくれた事に、私はますます時代が求めても求めきれない理想郷の記憶の痕として、今日に問いかけてみたいと感じたのです。

版画家として、またアーティストとして、複製という概念は常に私を悩ませてきました。私の作品では、写真と版画が象徴的に共存しており、複製の概念や私たちが生きる消費社会に疑問を投げかけています。

しかし、それはおそらく問題ではない。この場所は、私たちに多くのことを問いかけ、教えてくれます。



21.11.2018



21.02.2021



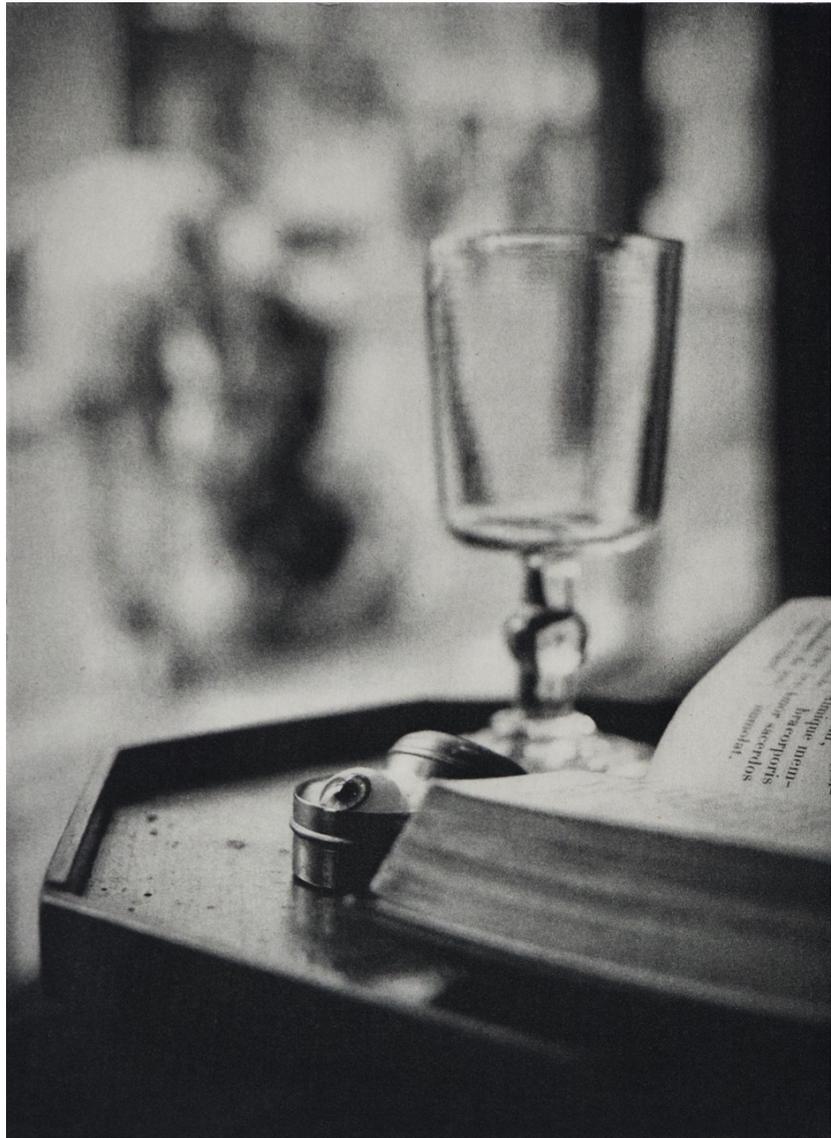
16.05.2017



13.02.2018



17.01.2019



07.09.2018



06.05.2019



02.05.2021



10.04.2019

私は現在も "flâneur" (歩く人) を体現しています。現実と虚構の二重性は、街を歩くと店の窓に映し出され私を誘惑します。
これが私のインスピレーションの源であり、私の作品はインクと紙のノウハウ、プレス機を通過する事によって具現化されています。
私のカメラは私たちの周りの世界のイメージを固定し、版画家のアクションとプレートにつける細かい傷は私の記憶を再活性化します。



16.10.2018



伊藤英二郎 (Eijiro Ito)

1971年岩手県一関市に生まれる。

1995年から渡仏、フランスで版画製作を通し“複製品が問うもの”をテーマとしアーティスト活動、現在に至る。

Site: www.eijiroito.net